

ふだん「あたりまえ」と思いこんでいる私に、忘れていた心をのぞかせてくれます。そうなんです。本当はなにもかもが、「不思議でたまらない」世界のはずなのです。大きなめぐみに生かされて生きていく私達なのです。そして最大の不思議が、今人間として生を受け、”阿弥陀さま“と出会っていることなのです。『正信偈』は、そのことのよろこびが綴られた、親鸞聖人の偈（うた）なのです。

「縁」について

副会長 北村幸雄

梅鶯仏教壮年会への入会
うもの強「縁」とい
今年平田同行の何年ぶ
りかの年番が回つてきま
した。今年までですと、ほ
とんど父や母にまかせて
いたのですが、50を超え
て、いよいよ自分の番
と自覚して受けさせてい
ただきました。
そんなおり、梅鶯仏教壮
年の発足案内がありま
したので、自然な流れで
入らせていただくことが
できました。
そして、「入会させてい
ただいてよかった」、
正直な感想です。定例会
には出席しているのです
が、予習や復習が十分に
ないで、の悪い会員では
ありませんが、毎回、新
見があり、自分でも何
の抵抗も無く、むしろ積
極的に出席が続いていま

す。今までほとんどの縁のな
かだった私の家では、驚き
わりの様に、家では、驚き
の目で見られては、驚き
「本当の宗教とは、仏教
とは、他力本願とは、お
盆とは、報恩講とは、お
とりこしとは、符の勉
強（音階や調子、符丁の
意味）など、いままで
とんど知らなかったこと
が、一つひとつ解きあか
れ、そして納得すること
が、でき、自分自身が何
得（損得ではない）を得
（得）ているような気持ち
になります。
これに繰り返されていく
この中、何かに「なんでも
う（）が芽生えてくるので
は、ないか」と想像してい
す。先、それを楽しく、こ
の先、あわてず、ゆっく
りと、自然体で、続けさ
せていた、だいたいと考
ています。
最後になりましたが、い
つも世話になりました、ご
りのご住職はじめご家族
の皆さんには、あらため

てお礼を申し上げます。
今年も手間を
おかけします
が、よろしく
お願いします
ます。



題材法話

「きみようむりようじゆ
にならぬ・・・」。私達
蓮如上人の時代、親鸞
聖人の主著「教行信証」
の中、これに「念仏」と
し、これに「同じく親鸞
人制作」をつけて朝夕の
お勤めの形式に整えられ
たもの、
教行信証の中の正信偈は
正式には「正信念仏偈」
と、
歌といえます。「偈」は
人が如来の慈悲心に遇
いえた感動を、胸に
内に秘めておくことが
たわななく、感動の漢詩
であ

ります。
具体的には、お釈迦様の
ご説法や、インド・中国・
日本人の僧の教説にもと
づき、その悦びをうたわ
れていきます。
どの様な内容かにつ
ては、今後折に触れてい
ますが、正信偈は親鸞聖
人が自らのうち宿る大
な、仏徳を讃迎すると同
に、あなたも大きな慈悲
に「あなたもどうぞ浴して
ください」と呼びかけて
でもありません。
ですから、勤めるだけ明
く元氣にお勤めすること
が大切です。そして、な
よりも大事なことは、お
つとめは決して仏になる
ための行ではなく、す
に「仏とならさず、いた
だく私である」ことを悦
ぶ報恩感謝の行であると
いうことです。
ところで、この120首の
漢詩である「正信偈」、ま
た七五調の多くの「和
讃」、共に文学作品として
も高く評価されています。
親鸞聖人は優れた文人でも
あったのです。